

アセビ（アセボ）

牧 幸 男

私の生家の中庭には樹高3m越す大きなアセビの木がある。4月になると白やあるいは赤味を帯びた小さなすずらんのような花が、^{すだれ}簾のように咲く。その姿は美しく春の楽しみのひとつとなっていた。華やかでもないが、なんとなく雅味が深く静かで、中々捨てがたい味わいがある。どことなく気品を感じる花で、昔から多くの日本人に愛されてきた植物である。私達がアセビに接する機会は、庭木や生け垣で、自生の植物を目にすることはあまりない。アセビの花が有名な場所は、伊豆の天城と奈良公園である。特に、奈良公園では積極的にアセビを植えたとのこと。併せて、鹿が誤ってこの植物を食べると、角が取れることを知っていて食べないので、増えたとされている。



赤みを帯びたアセビの花

アセビは、わが国原産で、本州、四国、九州の乾燥した山地に自生するツツジ科の常緑低木である。非常に長寿の樹木で100年から200年になる老木も生育している。春の中頃、枝の先に複総状花序を下垂し、多数の長さ5～6mmの白や赤みのある^{つぼ}壺状の花が多数咲く。樹皮は褐色で、若枝は緑色、初め^{のち}うちは毛があるが、後に無毛となる。世界各地に20種程の類似植物があると言われている。最近品種改良が進み、多くの園芸品種が生れている。花の先端が桃色のクリルマス・チェアー、花が桃色のダイセン、草丈が矮生のヒメアセビや葉に白色の斑があるフクリンアセビ、花序が長いホナガアセビなどが有名である。葉は枝の先に束になって互生し、葉縁には鋸歯があり、葉身は深緑色で厚い革質、表面に艶がある。果実は秋に熟す。冬の間も植物に残る蕾があることから、一年中楽しむ植物である。花が終わると^{こずえ}新梢の先端に、翌年の春に咲く花芽の準備が始まる。



白色のアセビの花

現代の人々はアセビを好む人が多い。古くから愛されてきた植物と思われるが、数奇な運命を秘めている植物である。『万葉集』(629～759)に10首も登場し、万葉表記は馬酔、馬酔木、安志妣、

安乃婢が使われている。奈良時代に人々に好まれアセビには、花を愛でた歌人の面影を示す歌が多く、奈良時代末期頃には、庭園にアセビが植栽されて観賞されていたと思われる。不思議なことに、『古今和歌集』(905～914頃)以降からは歌題として殆ど登場してこないことだ。この理由はさまざま考えられるが、恐らく植物が馬にとって毒性があることがら、有毒植物のイメージが先行し嫌われたのだろう。

平安時代、鎌倉時代の^{ゆうえん}典雅幽艶を愛する歌人に忘れられていたアセビも、明治時代になり自然を見直す気運の高まりの中から、再び人々はこの植物に関心が示されるようになった。正岡子規を継承した伊藤左千夫は、憧れの植物の名を用いた根岸短歌会の短歌誌『馬酔木』を創刊した。この短歌誌は、後にアララギ派となるのである。又、堀辰雄が『浄瑠璃寺の春』に「・・・一種の憧れをもって馬酔木の花を大和路のいたるところで見ることができた・・・」と文人の憧れの花となっている。

池水に 影さえ見えて 咲き匂ふ 馬酔木の花を 袖に扱きれな 大伴家持
 のぼり来し 比叡の山の 雲にぬれて 馬酔木のはなは 咲きさかりけり 斎藤茂吉
 来し方や 馬酔木咲く野の 日のひかり 水原秋桜子
 花馬酔木 ころころと 散り散りたまる 島村茂雄

植物名は、アセボ、古名は馬酔木と呼んでいる。漢字で「^{あせび}馬酔木」と書き、馬が葉を食べれば毒に当たって苦しみ、酔うか如くにふらつくようになる木ということが理由である。牧野富太郎博士は「馬が中毒して酔っ払う木」と言う事実から、「足しびれ」→あしび→あせびと転化した説が一般的で、漢名に掃木しんぼくを当てるが誤りであると述べている。わが国原産の植物だけに多く、倉田悟著『日本主要樹木方言集』（1963）には153の方言が記載されている。主な別名はアシビ、アセボ（いずれも近畿地方の方言）、アセブ（出雲地方）、アセミ（越前地方）、アセモ（関東地方）等がある。この中でアシビがもっともポピュラーなのは、関東地方から関西地方に多く生育している植物であるからであろう。また、漢字は馬酔木、馬酔あしび、安志妣あしび、安之婢を当てるが、いずれも万葉仮名からの伝統を引き継いでいる。また、ヒガンノキは、春彼岸のころに花盛りとなるので、仏前の供花にされることに由来する。その他、『本草綱目啓蒙』（1803）では掃木を、『大和本草』（1708）では馬酔木を当ている。馬酔木の字は、中国の古書にあるため使う人もあるが、わが国のアセビとやや違う植物であると述べている人もいる。

学名は、*Pieris japonica*、属名はギリシア神話の詩に登場する9人の姉妹の女神のこと、種小名は日本に産する意味である。スウェーデンの植物学者ツンベリイ Carl Peter Thunberg (1796~1866) が万葉の時代に思いをはせ、命名したといわれている。彼は日本に滞在し、帰国後『日本植物誌 Flora Japonica』（1835~1844）を刊行し、その中で紹介している。

薬用は、葉にアセボトキシンなど有毒成分を含んでいるので、食べると吐き気、下痢、めまいを起す。日干した葉を煎じ、その液を薄めて害虫駆除や牛馬の皮膚の寄生虫退治に使ったり、便槽のウジ殺しに使ったりした。白井光太郎博士(1936~1923)は「アセビをウジバラヒと呼び、雪隠に入れ、糞蛆を殺すに用ゆ」と述べている。毒部位は、全株、葉、樹皮、茎、花、毒症状は、血圧低下、腹痛、下痢、嘔吐、呼吸麻痺、神経麻痺。近年では、殺虫効果を自然農薬として利用する試みがなされている。

植栽は、庭木、公園樹として植栽されるほかに、盆栽に利用する。その他、道路の中央分離帯の植栽樹に使われる。

利用は、『^{せんおうくでん}世坊専応口伝』（1537）には「祝儀可嫌草本」の項があり、その中に馬酔木もそのひとつに上げられている。アセビは有毒植物だから一応、祝儀のときだけ遠慮せよと思われる。但し裏を返せば、普通一般には良いことになり、事実、昔から立華にも多く用いられて痛く言われていると記述されている。万葉人と同じくこの植物の枝葉や花の持つわびしくも風情豊かな雅味を賞してのことだろう。

花言葉は、「犠牲」「献身」「清純な心」である。

